特別なニーズをもつ子を支える CASE 1

「その子らしさ」を受けとめたうえで集団生活に溶け込むベースを育てる

葛飾こどもの園（その）幼稚園（東京都・私立）

さまざまな子どもがかかわり合うことを大切にする葛飾こどもの園幼稚園。年齢の異なる子どもや特別なニーズをもつ子どもが一緒に遊ぶ過程で、お互いを尊重する気持ちを育てています。特別なニーズをもつ子どもには、一人ひとりに合わせたさまざまな保育場面を経ながら安心して集団生活に溶け込んでいけるようにしています。

「違い」から生まれる衝突を育ちのチャンスにする

子どもの本音を大切にして一緒に解決策を考える

日常の中で自然物とふれ合うことを大切にする葛飾こどもの園幼稚園。樹木が生い茂る園庭では、子どもたちがうさぎやにわとり、アヒル、カモなどの動物にふれたり、夏には上半身裸で泥んこ遊びをしたり、思い思いに過ごしています。

さまざまな違いをもつ子どもがかかわり合う環境をつくることも園の方針の一つで、縦割りのクラス編成で異年齢保育を行うと同時に、特別なニーズをもつ子どもの積極的な受け入れを行ってきました。現在、138名の園児のうち、特別なニーズをもつ子どもは18名、各クラスに3～4名がいることになります。

こうした環境の中で子どもたちはどのようにかかわり合いながら、ともに育つのでしょうか。加藤和成園長先生が次のように説明します。

「集団の中にさまざまな子どもがいるとお互いの違いを明確に感じ、共に生活するために考える場面が多くなります。動き回る子どもによって活動が中断させられることもありますが、こんな時こそ保育者の働きによって、お互いを知り、近づくチャンスにもなるのです」

例えばリレーで足の不自由な子どもがいるグループが負け続けると、周囲の子どもから「○○ちゃんがいるから勝てない」といった声があがることがあります。このとき保育者は、周囲の子どもの悔しい気持ちを受け止めた上で共に考えていきます。

「負けて悔しいよね。でも、○○ちゃんは大切な仲間だよね。なにか良い方法はないかな。○○ちゃんにダンボールの車に乗ってもらって、みんなで引っぱるのはどうかな？」など、日常生活の中で共に活動するために柔軟に考えていくのです。

補聴器を使う子どもを見て、周囲の子どもが不思議がるときも、保育者はきちんと説明します。「○○ちゃんは小さくしか音が聞こえないけど、これを付けるとみんなの声が大きく聞こえるんだよ。眼鏡と一緒だね」などと伝え、一人ひとりの違いを理解するように促します。

こうした保育に欠かせないのが、保育者が特別なニーズをもつ子どもの気持ちや特徴をしっかりと把握していること、そして十分な信頼関係を築いていることです。そのために登園後1時間、特別なニーズをもつ子どもたちにねらいを合わせた“遊びの場”をつくります。この小グループ活動の時間は、子どもの気持ちをきちんと受け止め共感する場として大切にされています。

季節感を大切にした園庭では、年齢の異なる子どもたちが一緒に遊びをつくり出している。

「小グループ活動」で特別なニーズをもつ子とじっくり向き合う

気持ちを受け止めることで安心感や信頼感をはぐくむ

特別なニーズをもつ子どもで、ゆっくりとしたかかわりが必要であると園と保護者との話し合いで判断された子どもは、入園後、小グループ活動に参加します。子どもたちは登園後の小グループ活動を中心に園生活を送り、徐々に保育時間を延ばしていきます。2学期以降、園生活に慣れてきたら、みんなと同じ時間帯を過ごすようになります。

各クラスには3名の担任がおり、うち1名が小グループ活動に入ります。小グループ活動には、ほかの園児が遊びにくることも多く、5、6名の保育者と10～15名の子どもが活動に参加します。この小グループ活動について担当の鶴巻直子先生が説明します。

園長
加藤和成先生

小グループ担当
鶴巻直子先生

「感触遊びや粗大運動などの身体接触を多く取り入れた遊びの場を設定しています。自分で遊びを選んだり、仲間をつくるのはなかなか難しいため、子どもの興味を踏まえて保育者がいくつか遊びの場を考え、ゆったりとかかわっていきます」

大まかな方針は年度初めに話し合い、今年度は歌やリズムにかかわる活動に力を入れています。わらべ歌を歌ったり音楽に合わせて体を動かしたりする活動は、平行遊びであっても仲間と一緒という雰囲気を感じられるよさがあります。

それでも、子どもが途中で活動から外れたり、興味を示さなかったりすることもあります。そのようなときは、子どもの様子から「今、何を求め、必要としているのか」をじっくりと時間をかけて感じ取ります。そして、その子どもに合う遊びの場を小グループ活動以外の場につくったり、保育者を介して同じ興味をもつ子どもと遊んだりします。

「クラス活動では全体を見ることに追われがちですが、小グループ活動では一人ひとりに焦点を絞れます。言葉だけでなく表情や態度からも、気持ちや感情、興味、さらに成長などを読み取れて、次に何を必要としているかを感じとることができ、一人ひとりの可能性を広げやすくなります」（鶴巻先生）

子どもの中に、自分が認められ、受け止められているという安心感や信頼感が広がっていきます。小グループ活動は、一人ひとりの子どもが保育者と気持ちをやりとりし、「その子らしさ」を表現できる場として機能しているのです。

小グループ活動の流れ

❶登園してすぐの時間はそれぞれの子どもが自由に遊び、保育者は状態をよく観察する。

❷慣れてきたら、子どもの気持ちを尊重しつつ、グループ遊びを取り入れる。

❸終盤は歌や絵本の読み聞かせなどを行い、仲間とともに過ごす楽しさを伝える。

小グループ活動の意図を保護者に丁寧に伝える

保護者とは、入園前、子どもの様

子に気になることがあれば十分に話し合い、必要に応じて小グループ活動への参加をすすめます。

「入園前、小グループ活動に対して周りの子どもから隔てるようなイメージをもつかたもいます。しかし、子どもによってはゆっくりと気持ちを伝え合う小グループ活動の体験が必要であることを、何日か遊びにきてもらいながら丁寧に説明していくと、大半の保護者のかたは納得されます」(園長先生)

入園後は、送迎時や連絡ノート、父母会などで日々の活動や子どもの育ちを伝えます。話すことが得意ではない子どもの場合、園での様子が伝わりにくいため、特に保護者への丁寧な報告を心がけます。

子どもたちがともに遊ぶ環境をつくる「コーナー活動」

遊びのテーマや環境に配慮し一体感を演出する

小グループ活動が終わる10時頃から園庭で体操が始まり、特別なニーズをもつ子どももクラスに集まります。体操に参加せず、まわりで見るだけの子どももいますが、「みんなでお弁当を食べられるようになってから体操に誘おう」などと、合流のタイミングや接し方が担任の間で共有されています。

体操のあとは、3名の担任がそれぞれ遊びの場を考え、子どもは好きなコーナーで遊びます。遊びの内容は、なるべくどのような子どもでも入りやすいように配慮されています。例えば水遊びが好きで教室を水浸しにする子どもがいれば、屋外で水遊びをするコーナーを設置し、また、ひとりでの砂遊びにこだわる子どもがいれば、砂場の近くにおままごとコーナーを設置します。興味の対象が自分の遊びにしかない場合でも、他の子どもに「○○ちゃんから砂をもらおうね」などと声をかけることで子ども同士がかかわる場面をつくります。

工作や泥遊び、動物とのふれ合いなど多様な遊びを用意。別のクラスのコーナーでも遊べるなど、自由な雰囲気を重視する。

すべての子どもたちがともに認め合い、生活するうえで何より大切なのは、「保育者がすべての子どもに分け隔てなく自然にかかわること」と、園の先生がたは口をそろえます。例えば、特別なニーズをもつ子どもには、「周囲の子どもと同じことをさせよう」ではなく、「この子どもにとっては何が楽しみなのか」と、一人ひとりの違いを認めて接します。すると、その気持ちは周囲の子どもに伝わり、自然に相手を受け入れていく雰囲気が生まれます。保育者の働きを通して、子どもたちがお互いの違いを理解し、尊重し合う関係が育まれているのです。

葛飾こどもの園幼稚園

◎1953年、キリスト教の教会に付設された幼稚園。「自由主義保育」を掲げ、子どもが自然にふれ合いながら自分で遊びをつくり出す自由な活動を重視。昭和30年代に開始した林間保育(自然の中でのお泊まり保育)も特色の一つ。

園長　加藤和成先生

所在地　〒124-0012
東京都葛飾区立石2丁目29番6号

園児数　138名(3歳〜5歳児)

特別なニーズをもつ子を支える CASE 2

保育者の「みんなで見守る」姿が周囲の子どもも育てる

村山中藤(なかとう)保育園「櫻」(東京都・私立)

村山中藤保育園「櫻」では、保育者みんなで一人ひとりの育ちを支えることを大切にしています。特別なニーズをもつ子に関しては、みんなで指導計画を立て、指導方法を共有し、見守ります。そんな姿を見て、まわりの子どもたちも、特別なニーズをもつ子への接し方を自然に学び、思いやりの心をはぐくんでいます。

子どものニーズを的確に把握し、自ら伸びようとする力を支援

自ら育とうとする子どもの力を支えたい気持ちが出発点

村山中藤保育園「櫻」が、特別なニーズをもつ子どもの支援に本格的に取り組み始めたのは、1983年のことです。当時園長を務めていた高橋保子先生(現・理事長)は、その理由について次のように話します。

「すべての子どもは、自ら育とうとする力を、心や体の中に秘めています。そして、その力を伸ばす手助けをするのが保育者の役割です。しかし、私たちは、特別なニーズをもつ子どもたちに対して、自ら育とうとする力を伸ばすような支援が本当にできているだろうか。そんなふうに悩むことが少なくありませんでした」

子ども自ら育とうとする力を信じて支援するには、子ども一人ひとりのニーズを的確に把握するという作業が欠かせません。

「特別なニーズをもつ子を理解し支えていくには、まず、保育者が子どもの発達や障害について正しい知識をもつことが必要なのでは?

子どもを育てる立場にいる以上、『知らない』では預かれないはず……私はそう考えたのです」

高橋先生は、まず子どもの発達や障害についての専門的な知識を職員全体で共有することから始めました。また、子どものニーズを正確に把握するため、積極的にセミナーや勉強会に参加して実践例を学んだり、ときには専門家に直接相談に行ったりしました。

「当時は今と比べて、まだ情報が少なかった時代。少しでも知識や指導のヒントを得るために、医師や大学の研究者のところに足繁(しげ)く通っていました」と、高橋先生は振り返ります。

こうした活動の中から培われてきたのが、外部の専門家との太いパイプです。現在園では、自閉症研究や障害児教育の専門家に来園してもらい、自分たちの子どもの見方や指導のポイントが適切なものかどうか、アドバイスをいただいています。

園では、病院との連携も深めてきました。特別なニーズをもつ子どもが入園してきたときには、保護者の了解を得たうえで、子どもの主治医と面談をすることもあります。医師が子どもの状態をどのように捉えているか、集団生活を過ごすうえでどんなところに気をつけてほしいと考えているかを、面談によってしっかりと把握し、園での保育に生かします。

また、子どもが療育センターなどで訓練を受けている場合も、その施設のスタッフと面談をして、どんな観点で指導や訓練を行っているかについて話を聞いています。

園では、学年単位での活動の時間と、異年齢集団による縦割りの時間を設定。さまざまなニーズをもつ子ども同士が一緒に活動する機会を多く設ける。